

第1巻 第1号

2011年3月29日発行

2010-12年度 日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(B)
22320169

「地域文化」の生産・流通・消費に関する文化地理学的研究

「地域文化」研究会ニューズレター

はじめに

今年度は初年度でしたが、相変わらずの慌ただしさ中であつという間に過ぎてしまいました。3月11日の東日本大地震は、下関での合宿研究会最終日の解散直後に発生したため、忘れ難いものとなりました。それぞれ難儀な帰路となりましたが、関東では航空路や鉄道に大きな影響が出たため、大変な苦勞されたメンバーの方もおられます。無論、被災地の惨状を眼にしては何程のものでもありませんが。あと2年の間に、何かこの科研で貢献できることはないかと考えています。皆様方からもアイデアをいただければ幸いに存じます。

ところで、ここに本研究会のニューズレター第1号をお届けします。今号の記事をお寄せいただいた方々に感謝いたします。また、研究協力いただいた北川さんから記事をいただいております。引き続き「地域文化」なるものを広義に捉え、各方面からの刺激を受けていきたいと考えます。

今年度第1回の研究会は、5月28日(土)・29日(日)に木曾路で行います。

(大城)

ホームページもご覧ください。

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~oshiro/cb1.html>

今年度開催した研究会と報告

第1回研究会@京都 7月24日・25日

・IGU 2010 @ Israel 地理学史部会参加報告……………島津俊之

・立地創造としての小倉町界隈……………加藤政洋

・Workshop on foot @ 祇園・清水界隈

* JR二条駅西側の再生町屋街(?)の一つである食堂/共同作業所「ハイ・どうぞ」の2階座敷を会場に研究会を行いました。加藤さんによる報告を受け、町屋再生の現状を確認できたことには大きな意義がありました。夕方、千本中立売のジェントリフィケーションを見て、北野天満宮、上七軒界隈を廻りました。翌日は南座で集合し、終日祇園、清水寺界隈の現状について視察しました。島津さんのイスラエルの映像満載のIGUコミッションの話も大変興味深いものでした。またこれを受けて2013年のIGC@京都での対策について話し合いました。

第2回研究会@下関 3月9日・11日

・イギリスにおける風景の生産・流通・消費とスコットランド……………森 正人

・国土調査機関としての内務省地理局—官庁の学問的実践をめぐって—…島津俊之

・下関市立美術館「没後80年 高島北海展」を観る

・Workshop on foot @ 下関・門司港

* 壇ノ浦直近の火の山公園中腹にある眺望頗る良好な国民宿舎「海峡ビューしものせき」で、初日夕方に森さんのスコットランドの風景表象に関する報告と島津さんの高島を含む官庁地理学者に関する報告が行われました。翌日は下関市立美術館で高島展を観覧後、防府の街を歩きました。その後唐戸から門司港へ船で渡り、三宜楼や門司港レトロをひと通り観た後、関門トンネルを歩いて宿に戻りました。なお、高島なる人物については本NLの島津論文でご堪能いただけます。

目次

高橋北海を「地理屋」としてみる	2
島津俊之	
小京都高山の生産・流通・消費	4
森 正人	
戦後ジュリ馬の盛衰を追って	7
加藤政洋	
長崎県平戸島を歩く	9
福田珠己	
クロード・ラフェスタンをめぐる	11
遠城明雄	
イタリア地理学者への旅 —フランコ・ファリネッリ (ボローニャ大学)—	12
北川真也	
鹿児島島の「郷土」研究会模様	16
大城直樹	

高島北海を「地理屋」としてみる

島津 俊之

地殻から大気に至るまでの、地圏・水圏・生物圏・人間圏・気圏が相互に関連しあって存在しているというのは、現今の系統地理学者には普段あまり意識されないかもしれない地理学の古典的テーゼだが、「没後80年高島北海展」の観覧を含んだ下関での研究会最終日の午後、東北地方太平洋沖のプレート境界で生じた出来事に起因する一連の事態は、上述の抽象的テーゼを最悪のかたちで具象化してしまうものであった。高島得三＝北海（1850-1931）は、かかる諸圏間の関係態としての風景の在り方を絵画で二次的に表象しようとした、などという物言いは、被災地域の過酷な姿を前に空虚に響くしかないが、小文の主題がその点にあることは蔽いようもない。内務省地理局の「山林課系列」の人物群の一人として、ほんの僅か触れただけに過ぎなかった人物を（島津2009: 16）、地理屋としてみるつもりは元々なかった。高島北海は、同時代や後世の人々によって、これまで官僚、地質学者、植物学者、そして画家などとして多面的に認識されてきたが、彼を地理屋としてみる企てにどれほどの意味があるのか疑問視されても不思議でなく、かかる思い付きを確たる文献的証拠も持ち併せないまま2011年3月9日夜の科研合宿で披露して呆れられても仕方なかった。無理もない話で、地質調査・山林調査・風景画・景勝地保存の四題漸から、「地表諸現象を総合的に見ようとしたので地理学者…」などと言われても困るだろう。しかし、分かっちゃいるけど、批判的に見ていたはずの現在主義にどっぴりつかり、過去の思想・実践のあちこちに「地理学」を見出そうと躍起になっている己の滑稽さを反省的にモニタリングしつつも、同時代史料の不意打ちが、現在主義の奈落から同時代主義のせり上がりへと劇的な状況転換を遂げる瞬間を一度経験すると止められない。

劇的な状況転換は、今回の場合、前述の高島北海展を3月10日に見て、その場で買った図録（下関市立美術館 2011）に事後的に目を通したときに生じた。高島のテキストのなかに、「我は地理

屋なり」的な物言いを見出した瞬間である。図録のどこにそんな物言いがあるのか、ここでは書かない。論文ネタになりそうなので、出し惜しみすることに決めたが、複数あるとだけ言っておこう。

さて、ウェブで検索したところ、『山口新聞』の2011年1月1日付紙面に次の如き記事が掲載されたようである。ウェブ上の記事の一部をそのまま引用する（ゴシック引用者）¹⁾。

明治、大正期の日本画家で、山口県出身の高島北海が、県内の名勝地や天然記念物などの基礎資料を、克明に調査した内容を伝える書簡34通が見つかった。昭和初期に県が国の指示で出版作業を進めていた『山口県史蹟名勝天然記念物の概要』（1937年刊行）の執筆者に、北海がまとめた調査内容をその都度手紙で送っていた。関係者は「美術の範囲を超え、地理・植物など広範囲にわたる北海ならではの資料で、本県の名勝地開発の歴史をさぐる上で極めて貴重だ」と話している。書簡は現在、山口市内の史料収集家の手元にある。県庁で『山口県史蹟名勝天然記念物の概要』を執筆した当時の山口県史蹟名勝天然記念物考査員・岩根又重に北海が宛てたもの。岩根は地理学者として知られる岩根保重の叔父。いずれも遺族が保管していた。多くは巻紙に毛筆で書かれ、1925（大正14）年から30（昭和5）年にかけて出されていた。下関市の満珠干珠島、彦島、蓋井島など各地を調査した報告が主な内容。29年の手紙には、北海が内務省の児玉九一事務官（児玉源太郎元陸軍大将の子息）に会って、青海島（長門市）や石柱溪（下関市）を名勝天然記念物指定してもらえるようにしたことなどが書かれている。調査内容は北海一人のものもあれば、協力者が調べたものを北海が執筆者に送ったものもあった。

史蹟名勝天然記念物指定のための基礎的かつ多面的な地域調査を、高島北海が行っていたということ、その調査結果を記した書簡群が「発見」されたということが、ここには記されている。彼の関心が、地質や植生といった個々のアイテムのみでなく、それらの関係態としての相貌＝風景に向けられていたことが窺える。このことも、高島北海を地理屋とみるための一証拠となろうか。ちなみに岩根保重（1900-1970）は、京都帝国大学文学部で地理学を学び、戦前は近世地理学史にまつわる業績で知られ、昭和10（1935）年の立命館大学専門学部文学部歴史地理学科発足にあたり、最初の地理学スタッフ（講師）として着任した人物である（立命館大学文学部地理学教室 1984: 1）。「地歴科開講の日が何日であったかは記憶にないが、その日は木曜で偶々私の地理学発達史の授業が第1時間目であった」と語る、「立命館大学地理学科のいわば幕開きをした」（岩根 1984）この人物は、GHQの教職追放政策によって教授職を追われ山口に帰郷した。とくに軍国主義者というわけでもないのに、「どうも地政学の牙城のように思われていた京大地理教室に出入りしていたというのが追放の理由になっただけ」と、岩根の京大の後輩で、同じく教職追放処分となった村上次男は語る（村上 1993: 84）。「禁衛隊」の学園にして、なぜ岩根先輩だけが、と。追放解除後、岩根は山口県立博物館長や山口県立医科大学教授を務めた（浜田 1982）。その叔父と高島北海とが、因縁浅からぬ関係にあったわけだ。地理学を志した甥っ子と、「地理学と地質学とは唇齒輔車の関係であつて、恰度文法の文章に對するが如く、地質学は地文の文法を説くものである」（下関市立美術館 2011: 216）と喝破した文展審査委員の間に、接触はあったのだろうか。ところでわたしは常々、高島北海がナンシーでエミール・ガレに影響を与え、そこからアール・ヌーヴォーが生まれたという言説に神話的な胡散臭さを感じていた。この物言いは、芸術選奨文部科学大臣賞受賞作である高樹のぶ子の

『HOKKAI』のテーマの一つをなすが（高樹 2005）、件の図録には、そこに実証のメスを入れようとする鶴飼（2011）の論考も収録され、わたしにとってはお買い得であった。とはいえ、わたしのスタンスは、想像的な性描写をも含む

『HOKKAI』を文学的フィクションの聖廟舎へと祭り上げる所作からも距離を置くものである。高樹の創造的ファンタジーは、経験のバックアップを俟っている。

高島北海は、諸圏間の関係態としての風景を、反省的に一次表象しうる眼力を有していた。そし

てまた、その一次表象から二次表象を印象的に描き出す技倆をも有していた。高島北海は、己の直接経験する一次表象と、描き出される二次表象の狭間を自在に往き交うひとであった。まるで、同じ2011年春にフランクフルトから来日した、北海に面する国の画家が描き出したひとのように。地理学者は、地図を手許に据えながらも、地図でなく窓の向こうを見遣っている。

地理屋としての高島北海は、地理屋の仲間たちと多磨霊園に眠る²⁾。仲間たちとは、箕作省吾（1821-1846）、松島 剛（1854-1930）、山崎直方（1870-1929）、田中啓爾（1885-1975）、今村学郎（1900-1983）、そして竹内啓一（1932-2005）。近世から現代まで、民間からアカデミアまで、自然地理から人文地理まで、そして地誌派からラディカル派まで。百花繚乱ではないか。

〔文献〕

岩根保重 1984. 星霜. 立命館大学文学部地理学教室編『地理学教室50年史』31. 立命館大学文学部地理学教室.

鶴飼敦子 2011. 高島北海と異文化交流史. 下関市立美術館編『没後80年高島北海展—造化の秘密を探る』152-159. 下関市立美術館.

島津俊之 2009. 国土調査機関としての内務省地理局—官庁の学問的実践をめぐって. 地質学史懇話会会報32: 16-17.

下関市立美術館編 2011. 『没後80年高島北海展—造化の秘密を探る』下関市立美術館.

高樹のぶ子 2005. 『HOKKAI』新潮社.

浜田清吉 1982. 岩根保重. 山口県教育会編『山口県百科事典』74. 大和書房.

村上次男 1993. 『回想は続く』村上次男.

立命館大学文学部地理学教室編 1984. 『地理学教室50年史』立命館大学文学部地理学教室.

1) <http://www.minato-yamaguchi.co.jp/yama/news/digest/2011/0101/1p.html>（最終閲覧日：2011年3月13日）

2) <http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/index.html>（最終閲覧日：2011年3月13日）

小京都高山の生産・流通・消費

森 正人

この短いエッセイは**1960**年代の国内観光において場所がどのように生産され消費されたのかを考える。第二次世界大戦後の日本で観光を楽しむことができるようになったのは**1950**代半ばからである。**40**代後半はまだ鉄道やバス、道路などの交通インフラが十分ではなく、国民の側にも旅行を楽しむ経済的ゆとりを持つものはそれほど多くなかった。高度経済成長が始まる**50**年代半ばになると、観光客が増加しそれに対応するために有名観光地のホテルが増改築をし、また観光客の目的も多様化し始めたのだった。そこで、日本交通公社が発刊した月刊旅行雑誌『旅』と、私の担当するゼミ学生の青木美佐紀が**2010**年度に三重大学人文学部に提出した卒業論文をもとにして、岐阜県高山市の小京都化を例に考えたい。

小京都は京都との対比と類似性で用いられる言葉である。京都が『旅』で初めて特集されるのは、**1961**年**10**月号で、それ以降、秋になると京都特集というパターンができあがる。六一年の特集から分かるのは、この当時の京都ではすでに社寺拝観の時間と料金が決められており、いくつもの寺社などの観光スポットを半日ないし一日をかけて案内するバスツアーも少なくとも八パターンはあったことである。さらに、舞妓との記念撮影、観光舞妓**1**名、地方**1**名を**4**、**50**分の宴席に呼ぶ料金なども紹介されている。つまり、『旅』では初めての特集号ではあったが、**1960**年代初頭の京都がすでに観光化されていた。それに対して文化人類学者の梅棹忠夫は「京都は観光都市ではない—観光客のために存在していると思われては困る」というタイトルのエッセイを同号に寄せており、京都の大規模な観光化とそれへの嫌悪感が**60**年代初頭には見られたことが指摘できる。

日本の伝統文化の聖地と考えられていた京都の観光化は、京都以外の場所へ日本の伝統文化や伝統的風景に対するまなざしを向けさせることになった。それが『旅』で分かるのは、第二次世界大戦終了から**20**年後、そして『旅』創刊**40**周年でもある**1966**年に『旅』が読者たちの投票をもとに

選定した「新日本旅行地百選」である。この選定に先立つものとしては**1950**年の毎日新聞社による「日本観光地百選」、**1957**年には読売新聞社による「新日本百景」がある。

同年**11**月号で結果が発表され、その結果を踏まえて戦後の**20**年間で旅行感覚がどのように変化したのかについての討論会が誌上で紹介された

（「戦後**20**年目の旅行感覚を分析する」（**1966**年**11**月号）として掲載された。そして今回の選定作業で登場した**16**の新しい観光地を「戦後派の観光地」としたように以前に選定された風景地と今回のそれとの違いを、戦前的なるものと戦後的なるものに分けて理解する傾向があった。討論会で評論家の秋山ちえ子はそれを「戦後の教育から言っても、今は、昔とちがって、自分で行ってみたい、自分の目で確かめたり、自分で考えるということ」（**99**頁）と、自ら選択することのできる戦後民主主義の文脈において、新しい観光地の登場を捉えようとしたのだった。

この旅行地百選では飛騨高山、倉敷、平泉、松江と歴史的な都市が入選していた。件の討論会では「これは投票者を信用したい」（**101**頁）とこの結果を高く評価し、さらに萩や津和野、福井県の大野、秋田県の角館の入選を望む声もあった。高山や倉敷は**1960**年代初頭に興隆する新婚旅行ブームの旅行先として次第に人気を集めていた。

高山は**1955**年に上映された映画「遠い雲」の舞台であり、撮影は高山市上三之町で行なわれた。また、**62**年にはNHKの番組「日本縦断」で高山の町並み、日下部家、一位細工、春慶塗が紹介され、同テレビ局の「女の園」、日本テレビの「女性ノート」が高山市で撮影を行なうなど、**1960**年代前半までにテレビメディアで取り上げられることが増加した。**63**年には暮らしの手帖社発刊の雑誌「暮らしの手帖」**72**号にて「山の向こうの美しい町」として高山市が紹介された。そこでは京都にない慎ましやかさや静かさを持つものと語られたのだった。東京周辺からの観光客が次第に増加し、**1968**年には**38**万人の観光客を迎えた。

京都にない雰囲気を持つものと**60年代前半**に紹介されはじめた高山は、**1926年**改訂の『飛騨山川』で「小京華」という語でもって形容されていた。それが現在のように「小京都」として表象されるのは、**1961年**の実業之日本社刊行『ブルー・ガイドブックス**14** 上高地』にまで遡ることができる。ただしその中で高山市を取り上げるページ数は**164**ページ中わずか**4**とすこぶる少ない。まだ高山を上高地への玄関口として紹介することが主たる記述様式だったのである。小京都としての高山が広く人口を膾炙するのは**60年代末以降**だと考えられる。**1966年**の『旅』の座談会では「小京都」という言葉は使用されなかった。春の旅行シーズンに向けた**1969年4月号**の『旅』は、特集「全国小京都」を組み、全国**15**の小京都を紹介した。表紙は高山で行われる高山祭りの山車である。編集長の岡田喜秋はこの特集の目的を、明治**100年**を契機に日本らしさ、伝統文化といった文化遺産を見直そうとする中で、日本の伝統を失いつつある京都ではなく、地方都市にそれらを求めようとする事とする。小京都以外にも、伝統、旅愁、郷愁、郷土、城下町などといった言葉とともに古い伝統的な街並みに価値を見いだそうとする態度を**1970年代初頭**の『旅』ではたくさん見つけることができる。これらの特集で取り上げられる場所は小京都として紹介されるなど、カテゴリー的に重複するものも多い。

小京都は、その六年後、**1975年1月号**で再び特集される。そこでは、小京都が平均的現代都市に変貌する京都と対比され、失われつつある日本らしさを小京都に見いだそうとする態度が確認できる。そしてこの特集で中心的に取り上げられたのが高山市である。記事によると、当時年間**160**万人が高山に押し寄せており、旅行者のうちとくに関西・中部地方からが**43%**、関東からが**36%**を占めていると言う。町中を闊歩するのは「『ディスカバー・ジャパン』のポスターやら、女性週刊誌のグラビアやらをちょっと安手にしたような一種独特の雰囲気」（**74**頁）を持つ若者たちであった。

興味深いことは、**1961年**に『ブルー・ガイドブックス』で上高地の玄関口である高山が小京都として紹介されたときには、それが京都との類似性で語られていたのに、**60年代後半**から全国的に広がっていく中では京都との差異が強調される傾向にあることである。**61年**のガイドブックでは「古い社寺」「格子模様に整理」された古い町並みの落ち着いた雰囲気、「豪華絢爛」な高山祭り、「人情、気質、生活様式など

諸事全般があまりにも京都のそれに類似している」ので「小京都」ともいわれている」（**65**頁）と書き付けられているのである。

高山と京都との対比は、土俗や力強さと優雅の対比としても語られる。社会学者加藤秀俊は、京都的な美学を体現する春慶塗の会館よりも、飛騨各地の民家を移築して作られた「飛騨の里」を好み、とりわけそこで見た豪放な重量感を持つ飛騨塗に感嘆する。そこに高山の土俗の力を感じるのである。民芸品、とろろ、麦飯、飛騨そば、田舎料理、囲炉裏などは単なるモノではなく、背後に「土俗の精神と人生とがある。要するに人間がいる」（**76**頁）と言う加藤は、小京都高山にこの人間のたくましさを見出そうとする。

『旅』だけでなく、実業之日本社発行のガイドブックを見ても、**1968年**発行の『ブルー・ガイドブックス**90** 高山と飛騨路』以降、高山はその町並みや民家の美しさを中心に積極的にその美しさが語られてきた。**76年**の『ブルーガイドブック**21** 高山・飛騨路』では単独で上三之町を紹介するページも設けられた。

小京としての高山市では、まず町並みの美しさ、そしてその背後にある人情や生活習慣の美しさが言祝がれる傾向にあった。その町並みは、上三之町保存会をはじめとする保存会活動により作り出されたものである。町並み保存運動への取り組みは、**1960年代前半**の川の美化運動を契機とする。**1963年**から子ども会を中心とした宮川の清掃活動が毎月行なわれ、**65年**の岐阜国体にとともなう「花いっぱい」運動をとおして、町並み保存への関心が高まった。最初に保存会構想を打ち出したのは上三之町南部の恵比須台組であり、翌**66年**二月に上三之町町並保存会が結成されたのだった。この保存会の活動は上三之町全体ではなく恵比須台組に限られており、**71年**にその名称が恵比須台組町並保存会と変更され、**73年**に恵比須台組をのぞく龍神台組、三安組、瓢箪組が上三之町町並保存会を結成した。さらに**74年**には上二之町保存会も結成されたのである。

恵比須台組による上三之町町並保存会は**1967年**から**68年**にかけて電柱を撤去し、軒裏配線を施した。また龍神台組でも**73年**に同様の措置が施された。これらは町並みの美しさを作り出すという目的の他に、高山祭りの主役であり**1960年**に国の重要有形民俗文化財に指定された屋台の曳航に邪魔であるということからもなされた。町の美観を守るために営業用の自動車以外の車両もこの時期に自主規制が求められた。

重要有形民俗文化財に指定された祭屋台に対して、高山市は資金的援助を行っていた。市が町並保存に助成金を拠出するのは**1971**年の出格子付設を嚆矢とする。それよりも前の**69**年、環境資源保護財団が当時の上三之町町並保存会に援助金を拠出していた。そして**73**年には高山市長が家屋所有者に伝統的建築様式への建て替えを奨励するのだが、それは前年に制定された「高山市市街地景観保存条例」を考慮したものと考えられる。

1960年代後半からの高山市における町並保存への取り組みは、小京都としての雰囲気醸し出すことになった。それが先に述べた観光における「戦後派」的傾向とかみ合ったと言えるだろう。さらに**1972**年からの文化庁による伝統的町並集落の全国的調査を受け、高山市では**73**年より**2**年間、国立文化財研究所による調査が行なわれた。こうした制度や調査を経て、**1977**年高山市は上三之町、神明町**4**丁目及び上二之町の一部を高山市三町伝統的建造物群保存地区に指定し、翌年には保存計画、保存基準を制定した。また**1979**年二月には高山市三町が重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けた。

この伝統的な町並みは伝統的な建築のための規制によって演出された。**1971**年、恵比須台組は出格子をつけること、アルミサッシを使用しないこと、柱などは古色とすること、軒先にはせき板をつけることを条件に市からの助成金を得た。また**1972**年の「高山市市街地景観保存条例」は建物の増改新築にデザイン上の規制を設け、それに従う場合には補助金を与える事とした。出格子は小京都の雰囲気を演出する重要な要素と考えられた。しかし明治時代の中ごろまで高山市の伝統的家屋で採用されていたのはシトミだった。戸締まりに手間がかかり、暗いということでシトミは減少し、代わって格子をはめ込み内側に障子を入れる家屋が現れた。この出格子は高山市の町並保存事業で伝統的建築様式として強調され、**1970**年代に急速に付設されていったのである。

参考文献

青木美佐紀（**2011**）「高山市の町並保存にみる『住民』意識」三重大学人文学部提出卒業論文。
森 正人（**2010**）『昭和旅行誌—雑誌『旅』を読む』中央公論新社。

戦後ジュリ馬の盛衰を追って

加藤 政洋

以前、わたしは那覇市の旧遊廓であった《辻》が、戦後どのような経緯で復活を遂げたのか考えたことがあります（『敗戦と赤線』）。調査の過程でわたしは、旧《辻》遊廓で（少なくとも戦前まで）営まれてきた旧二十日正月という祭礼に関心を持つようになりました。旧二十日正月とは、文字どおり、旧暦の一月二十日に営まれる豊年祭なのですが、ここ《辻》では獅子とミルク（弥勒菩薩）を先頭に、馬の頭部をかたどった玩具を胸部につけた尾類（ジュリ）、すなわちかつての遊女たちが廓内を練り歩くという、とてもスペクタクル性の高いイベントが合わせて実施されていたのです。

戦後、《辻》はしばらく復活しなかったため、当然、ジュリ馬も行なわれることはありませんでした。しかしながら、都市計画の一環として**1952年**に《辻》が料亭街として再興されると、その翌年にはジュリ馬も「春駒祭」と名を変えて開催されます。戦後、米軍統治下の沖縄では（実際はともかく）遊廓の復活は認められていませんでしたから、旧二十日正月に合わせてジュリ馬を実施するにしても、馬のなり手たるジュリはおらず、料亭の従業者やその他の女性たちがそれを担うことになります。つまり、戦後のジュリ馬は、単に馬になるのではなく、戦前のジュリに扮することにもなるわけで、それらのことがさまざまな場面で波紋を呼ぶことになるのです。

本科研の調査では、**2011年**の旧二十日正月関連の行事を見学するとともに、一年間を通じて、戦後のジュリ馬がどのように執り行なわれてきたがわかる新聞記事を集め、とりあえず一覧表にまとめてみました。まだ、記事を参照しているだけの状態ですが、ジュリ（遊女）に対するイメージの揺れ動き、観光との結びつき、そして経済の状況（とくに不況）、さらには歓楽街としての《辻》のありようと密接に関わり

ながら、表面的には旧二十日正月とジュリ馬と呼ばれながらも、その内実や実施形態を変えてきたことがうかがわれます。

2011年度も引き続きジュリ馬に関する調査を進めながら、〈祭礼〉〈伝統〉〈場所〉〈観光〉〈政治〉といった語句ないし概念を手がかりにして、迷走を重ねたジュリ馬の戦後史をまとめてみたいと思っております。



写真 ジュリ馬行列の絵葉書(戦後:年不明)

表 戦後ジュリ馬の開催状況

年	二十日正月	開催	動向
1953	3月5日（木）	○	18年ぶりに開催。名称を「春駒祭」に変更。
1954	2月23日（火）	○	栄町の料亭も参加。
1955	2月12日（土）	○	有名料亭14軒が参加。
1956	3月2日（金）	△	「新生活運動の余波」で行列は中止、余興のみ実施。
1957	2月19日（火）	△	行列は中止、祭礼・余興は実施。
1958	3月10日（月）	○	
1959	2月27日（金）	○	
1960	2月16日（火）	○	
1961	3月6日（月）	○	
1962	2月24日（土）	△	余興のみ開催。
1963	2月13日（水）	○	
1964	3月3日（火）	○	
1965	2月21日（日）	○	約350人の行列。「辻町の復興祭り」として。
1966	2月10日（木）	○	約100人の行列。
1967	2月28日（火）	○	約100人の行列。
1968	2月18日（日）	○	約200人の関係者が行列。
1969	3月8日（土）	○	「春の沖縄観光まつり」として。
1970	2月25日（水）	○	
1971	2月15日（月）	○	約100人の行列。
1972	3月5日（日）	○	
1973	2月22日（木）	×	「300年の歴史に終止符」
1974	2月11日（月）	○	約200人の行列にジュリ馬は14人。
1975	3月2日（日）	×	「伝統の『ジュリ馬』も中止」不景気のため。
1976	2月19日（木）	△	行列は中止、神事として「室内ジュリ馬」
1977	3月9日（水）	×	【記事なし、おそらく実施されていない】
1978	2月26日（日）	○	那覇市三大祭りのひとつとして復活
1979	2月16日（金）	○	18日（日）に開催。
1980	3月6日（木）	○	9日（日）に開催。
1981	2月24日（火）	○	3月1日（日）に開催。約40人の馬舞者。
1982	2月13日（土）	○	14日（日）に開催。
1983	3月4日（金）	○	6日（日）に開催。
1984	2月21日（火）	○	26日（日）に開催。
1985	3月11日（月）	○	17日（日）に開催。
1986	2月28日（金）	○	3月2日（日）に開催。
1987	2月17日（火）	○	22日（日）に開催。名称を「那覇旧廿日正月祭り」に変更。
1988	3月8日（火）	○	13日（日）に開催。
1989	2月25日（土）	×	【大喪の礼との関わり？】
			11年間にわたり実施されず
2000	2月24日（木）	○	27日（日）に12年ぶりに「旧二十日正月お披露目行列」として開催。
2001	2月12日（月）	○	25日（日）に開催。
2002	3月3日（日）	△	豊年祈願祭・奉納舞踊のみ実施。
2003	2月20日（木）	△	豊年祈願祭のみ実施。23日（日）に奉納舞踊。
2004	2月10日（火）		【記事なし】
2005	2月28日（月）	△	3月6日（日）に「旧二十日正月奉納演舞」としてステージ開催。
2006	2月17日（金）	△	「旧二十日正月豊年祈願祭」としてステージ開催。10人のジュリ馬。26日（日）奉納舞踊。
2007	3月9日（金）		
2008	2月26日（火）		
2009	2月14日（土）		
2010	3月5日（金）	△	

長崎県平戸島を歩く

福田珠己

2011年3月、長崎県北部にある平戸島を歩きまわる機会を得た。目的は、2010年、重要文化的景観に選定された「平戸島の文化的景観」を見学にすることであった。「平戸島の文化的景観」という文化財について、文化庁のウェブページでは次のような概要説明がなされている。

平戸島の小河川沿いの谷部には、安満岳を中心として防風石垣や石塀を備える春日・獅子・根獅子・宝亀、田崎・神鳥・迎紐差の集落や棚田・牧野が展開している。これらの集落の多くは、16世紀半ばから17世紀初頭にかけて書かれたイエズス会宣教師の書簡において、教会や慈悲組合についての記述とともにその名を確認することができる。また、現在も伝統的家屋の中に戦国～江戸時代初期のキリシタン信仰に起源を持つ納戸神を祀るなどかくれキリシタンとしての営みを続け、安満岳や中江ノ島のような聖地とともに、殉教地を伴う独特の様相を現在に留めている。棚田群は、大きなものでは海岸から標高約200mの地点まで連続して築造され、山間部に点在する若干の耕作放棄地を除けば、全体としてよく耕作されている。地元の礫岩を用いた石積みの中には、生月の技術者集団の手によるものも認められる。以上のように、「平戸島と生月島の文化的景観」は、かくれキリシタンの伝統を引き継ぎつつ、島嶼の制約された条件の下で継続的に行われた開墾及び生産活動によって形成された棚田群や牧野、人々の居住地によって構成される独特の文化的景観である。

(<http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shoukai/keikan/bukken.html>)

「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地」（文化財保護法）と定義づけられるように、地域の環境の中ではぐくまれてきた生業とかかわる棚田や牧野の景観や、人々が生きる集落の歴史性を反映した居住地の景観が、価値あるものとして明示されている。ローカルな人間・環境関係や歴史的背景が景観に反映されているという点がこの制度では評価されるのである（写真1）。

私が平戸島の文化的景観に関心をいだいたのは、上記とは異なる点においてである。むしろ、制度が導入された時期ではなく、2005～2007年度に、「採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」が取りまとめられた際に、重要な論点として位置付けられた点にある。拙稿「過去と未来の間で」（『環境と公害』38-1, 2008年）においてもこの時期の変化について論じたが、地域の人々の記憶や行為との関係、さらには、社会的に付与された意味やイメージ、様々な媒体を介したその表現までが、重要視されるようになったのである。

文化財「平戸島の文化的景観」の場合、そのような「無形の要素」の価値が明確に示されている。その一つが、いわゆる「かくれキリシタン」にかかわる伝統である。民俗信仰と融合しつつ、特異な様相を呈する点において、また、ユニークな歴史性を有しているという点において、「かくれキリシタン」という要素が常に説明の前面に出てきているのである（写真2）。

一方、禁教令解除後に布教が行われたカトリックの教会についても、保存計画において、集落を構成する重要な要素と位置付けられる。このことは、また別の動向、すなわち、2007年に世界遺産暫定リストに掲載された「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」をめぐる動きと併せて考える必要がある。平戸島では、1898年マタラ宣教師の指揮のもとで五島列島出身の大工に

よって竣工された木造の宝亀教会（県指定文化財、写真3）、1929年に建設された紐差教会が、関連遺産としてあげられている。また、カトリック教会だけでなく、弾圧と潜伏という歴史を物語る史跡、さらには、周辺の集落景観なども、近年の世界遺産の審査状況を鑑み保存管理すべき対象をして位置付けている。

つまり、「平戸島の文化的景観」は、一方では、ローカルな環境や生活と関連付けることによって評価され、他方では、より大きなキリスト教文化の中に位置付けられているのである。地域の文化遺産が、複数の制度・文脈の中で、位置付けられ、確定され、そして、活用されようとしているのである。このような「平戸島の文化的景観」はどのような関係性の軸から解き明かしていくことができるだろうか。

- ・人間—自然

従来から、「文化的景観」という制度が得意としてきた切り口である。

- ・人間—地域（社会）

生業や集落形成にかかわる。「かくれキリシタン」が「伝統」として位置付けられたこと、さらには、さまざまな状況に対応した集落の諸実践もこの視点で考えることが可能。

- ・地域—地域外（日本）

地域の特異性（例えば「かくれキリシタン」など）を位置付ける枠組みの必要性。また、「重要文化的景観」という文化財の有り様、さらには、地域活性化と観光にかかわる問題もこの軸で考えることは可能。

- ・日本—西洋、あるいは世界

キリスト教文化の中で位置付ける視点、あるいは、文化交流の視点。「古代から海外に窓を開き、大航海時代の貿易港として」（『平戸島と生月島の文化的景観保存調査報告書』2009年）の位置づけは、さまざまな観光戦略の中にもあらわれている。

短い期間の平戸島見学を通して感じたことは、事態の複層性あるいは複雑な絡み合いである。しかしながら、さまざまな文化施策は、その複雑さを単純化する方向に進むのが常である。平戸島の今後について、注視し続けたいと思う。



写真1 棚田のある風景



写真2 聖なる土地（根獅子地区）



写真3 宝亀教会

クロード・ラフェスタンをめぐる

遠城明雄

昨年、フランツ・シュタイナー社からクロード・ラフェスタン(ジュネーヴ大学名誉教授)の論文集(ドイツ語への翻訳)が出版された。タイトルは、『領域性の地理学へ向けて(のため)』で、9本の論文と翻訳者兼編者のフランシコ・クラウザーによる解説から構成されている。クラウザーは、ラフェスタンによる領域性の地理学の構想がドイツ語圏にほとんど知られておらず、その批判的受容は、近年のドイツ語圏における「空間」をめぐる議論にとって意味をもつと考えているようである。J. Dünneらの『空間理論 *Raumtheorie*』Suhrkamp, 2006やJ. Döringらの『空間論的転回 *Spatial Turn*』transcript, 2008など、ドイツ語圏でもアングロサクソン圏の影響を受けて、地理学にとどまらず、複数の分野で空間への関心が高まっており、本訳書はそうした潮流のなかで生まれたものかもしれない。また、それはアングロサクソン圏地理学の圧倒的な影響力において周辺化しつつあるフランス地理学の側からの抵抗を意図したものであるのかもしれない。うがった見方をすれば、英語圏の地理学者はフランスの哲学者の翻訳書ばかりを引用して、地理学者の書物(フランス語)を読まないといった「僻み根性」がないとも言えないかもしれない(なお、クラプトンとエルデン編集の『空間、知、権力 フーコーと地理学』(2007)には、ラフェスタンやラシーヌなどの論文が英訳されている)。

本書は、「パラダイムとしての領域性」、「媒介の理論としての領域性」、「社会的実践と認識の領域性」という3部構成で、理論の役割、労働と言語、技術と知、権力と空間といったラフェスタンの領域性概念の基本的骨格を示した論文と、領域性の視点から、近代と伝統、あるいは境界とグローバル化といった諸問題を取り上げた論文をバランス良く配置している。小生も類似の問題関心から、雑誌『空間・社会・地理思想』にラフェスタンの論文をいくつか翻訳した経験があるので、このセレクションにはそれなりに納得がいった。

ルフェーブルやフーコー、ドゥルーズらを取り

込んだラフェスタンによる地理学の認識論や「過程としての領域性」に関する議論が、1970年代後半から1980年代のフランス語圏地理学において異彩を放つものであったことは間違いないが、クラウザーの指摘によれば、その構想はこれまでフランスよりもむしろイタリアやポルトガル語圏の地理学者に大きな影響を及ぼしてきている(ラフェスタン自身、イタリア語で多くの書物や論文を著わしており、現在はトリノ在住のようである)。近年のフランス地理学が、地域研究において貴重な成果を挙げながらも、理論的な問題関心において停滞(?)((肯定的に解釈すれば、禁欲的とも言えるが)しているように見える遠因のひとつには、フランス語圏スイスとフランスの知的状況をめぐる微妙な関係があるのかもしれない。また言い古されたことであるが、規模に関係なく、複数の視線の交差する場に新たな発想が生まれるということであろう。

「ナショナルスクール」といったものを想起することは、もはや意味のないことかもしれないが、ラフェスタンやラコストなどを事例にして制度の構造や概念の流通をめぐる問題を取り上げるジュリエット・ファル(ジュネーヴ大)や、知のコンテクストの問題を論じるクリスティーン・シバロン(国立科学研究センター)は、「ナショナル」という場が知の構築にとって排他的なコンテクストでなくなりつつも、知と権力の布置関係のなかである一定の条件を構成しうることを指摘している。彼女たち自身は、小生から見れば、凝った英語を使いこなしてアングロサクソン圏のコンテクストに則った論文を書く能力をもっており、両方のコンテクストに属しつつ、そこからずれることができる人たちであるので、その指摘は一定の説得力をもつように思われる。月並みではあるが、「アングロサクソン圏」や「フランス語圏」など一括りにすることを避けながら、交差させて「読む」という態度も必要であろう。ただし、複数の言語圏へのかかわりと「批判的な複眼性」の獲得は、無関係とは言えないが、基本的に別の事柄であるけれども。

イタリアの地理学者への旅

——フランコ・ファリネッリ(ボローニャ大学)

北川 眞也

2011年2月28日にイタリア・ボローニャで、ボローニャ大学コミュニケーション研究科の地理学者フランコ・ファリネッリ (Franco Farinelli) 教授へのインタビューを行った。

ファリネッリ教授は、昨今のイタリアのアカデミズムにおいて、大きな注目を浴びてきた地理学者である。というのは、トリノにある大手出版社エйнаウディ社から、ここ数年の間に2冊の本を出版し、それらが大きな反響を呼ぶことになったからである。その2冊とは、2003年の『地理学——世界の諸モデルへのイントロダクション (Geografia: un'introduzione ai modelli del mondo)』、2009年の『地図学的理性の危機 (La crisi della ragione cartografica)』である。加えて、別の出版社から『大地の発明 (L'invenzione della Terra)』という本が2007年に出版されていること、『世界の諸記号 (I segni del mondo: immagine cartografica e discorso geografico in età moderna)』という1992年の本が、2009年に再版されていることから、イタリアでの活躍ぶりを容易に伺い知ることができる (日本語に翻訳されている論文もある。ファリネッリ、フランコ。2002。「地理学の一般理論のために」(遠城明雄訳) 空間・社会・地理思想7, 138-186頁)。

だが、ファリネッリ教授の活躍は、イタリア国内にのみ限られてはいない。ボローニャ大学卒業後の若かりし頃 (1948年生まれ) には、インドやアフガニスタンなどアジアで数年間フィールド調査に従事した経験を持っているという。そしてボローニャのみならず、ジュネーブ (ジャン=ベルナル・ラシン、クロード・ラフェスタン)、ロサンゼルス (ニコラス・エントリキン)、バークレー (マイケル・ワッツ、アラン・プレッド)、ストックホルム (グンナー・オルソン) の大学でも教鞭をとり、国際的な研究ネットワークを形成している。その成果の一つが、オルソンとダグマー・ライヒェルトとの共同編集によって、1994年に英語で出版された『表象の限界 (Limits of

Representation)』であったと言えよう。

では、なぜファリネッリ教授の地理学が、近年このように注目されるようになったのだろうか？それは、私たち (北川眞也+大城直樹) によるインタビューからも十分に確認することができた。インタビューは、ファリネッリ教授のいきつけと思われるボローニャ料理のレストランで、昼食をとりながら行われた。ファリネッリ教授は私たちの質問に対して、とても真剣に、そしてとても「あつく」返答してくれた。

今回の訪問においてもっとも重要な質問内容は、近代国家の成立に伴って、ローカルなアイデンティティが、イタリアではどのように再構築されたのかというものであった。イタリアは「後発」の国民国家として、中央集権的な国家建設を推進したわけであるが、その過程でどのようにローカルなものが、ナショナルなものの枠組へ統合され、再構成されたのだろうか。

ファリネッリ教授は、かれ独特のやり方でこの過程を説明してくれた。まず「単なる地理的表現としてのイタリア」という19世紀のオーストリア帝国の政治家メッテルニヒの言葉に言及することで、歴史的にイタリアには国家のような政治的単位が存在しえない状態があったことを指摘してくれた。「地理的表現」とは、イタリアには国家のような「政治的表現」などはないということである。実際、統一されるまでのイタリアは、ローマ帝国以来、同一の政治権力によって統治されたこともなく、当時の人々からすれば、極めて差異化された世界、分断された世界であった。ファリネッリ教授の言葉で言えば、イタリアは「場所 (luogo)」から構成されていたということである。ファリネッリ教授は、それぞれの地域が還元不可能、比較不可能な独自性を有している場合に「場所」を用いている。それは同一の尺度の下には統合しえない、自律的な場所のあり方であると言えよう (Farinelli 2003: 11) (以下で述べる「空間」とは相反する意味で用いられている)。

たとえば、統一前のイタリアは、南と北で差異化され分断されていた。パダナ平原における自由都市は、すでに中世の頃から大産業ではなく、情報・知識に基づいた資本主義を実現してきた。他方で、当時の南部には、ナポリとパレルモを除けば、ほとんど都市はなかったものであり、その経済のあり方は完全に異なったものであった。また振り返れば、イタリアには、都市自体を海洋国家として成立させていたヴェネツィア、ジェノヴァ、ピサ、アマルフィもあれば、ボローニャのように、ヨーロッパ大陸と地中海の間の連結地点として機能していたエミリア街道沿い諸都市もあった。イタリアにおける唯一のヨーロッパ大陸都市ミラノ、そしてボローニャで終わるパダナ平原、その南にはアペニン山脈が連なり、さらに南に広がる地中海地域。このように無数の場所から構成されていたイタリアは、突如として、空間的・領域的・中央集権的なものへと改変されることになったのであった。それが、イタリア統一であった。

ファリネッリ教授によれば、イタリアは「空間」化されることによって、近代国民国家として成立することになったという。ここで言われる「空間 (spazio)」とは、先ほどの「場所」と対置されている。ファリネッリ教授はいつも「空間」を、その語源となった *stadion* という言葉に則して用いている。*stadion* とは、古代ギリシャにおける距離の単位であり、まさしくある地点と別の地点との間の直線的距離を表わす言葉である

(Farinelli 2003: 11)。この直線性に基づいて地図上で表現される空間とは、二次元の幾何学的な世界である。でこぼこだらけで、単なる地理的表現であったイタリアは、平らな表面、諸部分が等価関係にある表面、つまりは近代国民国家へと変貌する。この表面こそが、地図学的理性がもたらす空間なのである (Farinelli 2003: 13)。

「場所」から「空間」へ。この過程が、あらゆるものをイタリアというナショナルなものへと無数のローカルなものを統合する。フィレンツェというイタリアの地理的に中心に位置する都市の名の下で、個々のローカルな言語は、人工的に構築されたイタリア語のもとへと包摂された。北部のルールを押し付けられた南部では、それまで徴兵など知らなかった家族が、息子を軍隊へ送ることを強いられた (軍隊について、エドモンド・デ・アミーチスの『クオーレ』に描かれている)。南部の経済が密接に結びついていた地中海地域の力強い経済活動は、インフォーマルなもの、不法なものとして扱われて、南部のローカルな産業は破壊され、南部は北部の生産物のための市場へと改

変された。

ファリネッリ教授によれば、イタリアの統一=空間化において、とりわけ重要な役割を果たしたのが鉄道であった。イギリスのロンドンから、パリ、ミラノを経由してイタリア南部のブリンディジまで走る「インド便」に関わる鉄道網の普及によって、まさに直線的に、途切れることなく、そしてできるだけ速い速度で、イタリアの各都市を連結することができ、直線性からなるイタリアという国家の領域性が具現化されていったという。

現在のイタリアでは、北部同盟 (Lega Nord) という政党が、南部から北部の分離を要求し、支持を集めている。北部同盟の主張がどれほど乱暴なものであろうと、ファリネッリ教授は、そこには確かに歴史的客観性があることも認めている。別にこのような主張は、北部同盟がゼロから作り出したわけではないのである。空間化を通して統合されてきたイタリア、より具体的に言えば、北部と南部の関係を、空間化を通して統合することで成立していたのがイタリアであるなら、北部同盟のような南北分断の主張が脚光を浴びている現状は、明らかに次のことを暴露している。それは、イタリアという国民国家の危機、そして空間化を生み出す地図学的理性の危機である。

イタリアの危機に言及したところで、インタビューの内容は、グローバル化と国民国家の危機というアクチュアルな話題へと移っていった。ファリネッリ教授からすれば、グローバル化とは、この世界の革命の変容である。ただ国民国家の危機をもたらすというよりも、それはこの世界を動かしている論理自体の変容なのである。それは、近代世界を特徴づけた「空間」の論理に代わり、「球体 (globo)」の論理が支配的になることを意味している。グローバル化 (globalizzazione) とは、文字通り、世界の「球体化」なのである。

では球体とは何か？ ファリネッリ教授はこう説明する。地図 (それは空間化の原理そのもの) は、それを見るときに明らかだが、見る主体にある一定のポイントから、地図=世界をまなざすように強制する。見る主体は、まったく動く必要はない。しかし、球体はそうではないという。球体は地球儀のように見る主体自らがそのまわりをぐるぐる動くか、球体に触ってそれを回転させなければならない。世界をみるポイントは、決して1つではないし、それは不動のポイントでもありえない。回転する、回転させる限り、対象に触れ、対象からは独立していない限り、世界を客観的に見ているわけではなく、極めて主観的な立場から見ていることにもなる (Farinelli 2003: 100)。

この球体化する世界、グローバル化する世界を、ファリネッリ教授は、「ネットワーク (rete)」の論理を通して説明してくれた。ネットワークという言葉は、現代世界の流行語でもあり、至る所で用いられているが、ファリネッリ教授はそれを厳格に定義する。それは、地図学的理性によって規定された時間と空間のなかには存在しないものである。空間化の論理に沿って、場所と場所を直線的に結びつけ、それらの場所を等価なものとして、同一の尺度の下に収めるようなやり方は、ネットワークの世界では危機に陥る。なぜなら、ネットワークの世界では、場所と場所の間の接続が、もはや論理的に数えることのできない規模で実現されるから、そしてそれらが同時に実現されるからである。場所と場所の間の関係-接続が同時多発的に実現されるとき、ネットワークの世界が出現する。ファリネッリ教授は、この時空間のない世界の姿が何をもたらすのかは、未だ不明瞭であると述べながらも、昨今のマグレブ諸国での民衆蜂起のなかにはその兆候が垣間みられるかもしれないことも強調していた。民衆が突如として蜂起したのは、民衆自身がネットワークを通してコミュニケーションをとっているから、新聞報道とは無関係に形成される情報や世論が、あらゆる境界、あらゆる管理を越えて循環するからなのである。このネットワークの論理について掘り下げること、そしてこの論理と未だ消えてなくなったわけではない空間の論理との間の関係について理解を深めることこそが、現在の地理学には求められていると力強く論じてくれた。

このように確固たる概念規定を通して現実を把握するファリネッリ教授の方法に直に接してみて、あなたの地理学は非常にオリジナルなものです、と尋ねてみたら、「オリジナル」と括弧つきならそう言えることたえてくれた。その理由は、1世紀以上前に、すでにカール・リッターやアレクサンダー・フォン・フンボルトといった近代地理学の創始者たるドイツの地理学者たちが語っていたことに、自らの地理学は基づいているからだという。事実、ファリネッリ教授は自らの著書のなかで、これらドイツの地理学者たちに頻繁に言及し、かれらの地理学を非常に評価している。かれら、とりわけ『エルドクンデ (Erdkunde)』が有した重要性は、ドイツやイタリアが統一される直前の時期に、地理学を地図学的理性へ、地図学へと還元してきた支配的な地理学のあり方 (リッターの言う「地図学的独裁」) に対して挑戦し、世界のビジョンを流動化させようとしていたことにあると説明してくれた。「時間-空間の圧縮」はすでにリッターが19世紀に論じていた、今でもドイツ語が理解できなければ地理

学を学ぶことはできない、といった語りからも、ファリネッリ教授が、この伝統を非常に重んじていることが十分なまでに伺えた (またそれゆえに、現在のイタリアの地理学、ヨーロッパの地理学、そして国際舞台の地理学において、自分は極めてマイナーなポジションにいても語っていた)。最後には、英語圏の地理学における自らの経験から、主流となっている国際的な地理学のあり方に対して批判的な意見も率直に語ってくれた。

ソクラテス以前のアナクシマン드로スやタレスといった哲学者を地理学者とみなし、西洋文化の起源に地理学の存在をすえるファリネッリ教授の思想、そして19世紀のドイツの地理学者のごとく、世界、大地、地球自体を論じようとするその思想のスケールの大きさ。膨大な知識を基盤にして、現代世界の時空の変化を鋭敏に感知し、それを適切に表現する知性。これらこそが、ファリネッリ教授の地理学が、昨今大きな注目を浴びてきた要因ではないだろうか。この「オリジナルな」地理学に、直に触れることができた今回の訪問は、とても刺激的で非常に印象深いものであった。

参考文献

Farinelli, F. 2003. *Geografia: un'introduzione ai modelli del mondo*. Torino: Einaudi.



ボローニャ大学旧館
(ヨーロッパ最古の大学とされる。大学自体は現在はボローニャ旧市街地に散在している)



Franco Farinelli 近影 (?)
〔http://it.wikipedia.org/wiki/File:Franco_Farinelli.jpgより〕



ボローニャの象徴、歪んだ二本の塔

鹿児島県の「郷土」研究会模様

大城直樹

2月中旬に鹿児島へ飛んで、この県における郷土研究の様子を調べてみた。空港着陸寸前に霧島の新燃岳から噴煙があがった。歓迎されてないということだろうか、不安がよぎる。相変わらず遠すぎる市内へのリムジンバス下車後訪れた鶴丸城跡にある鹿児島県立図書館の郷土資料コーナーは、前回の訪問以上に幕末物で溢れ返っていた（ように思う）。おそらく幕末以外の文献を考古学の他に求めるのは大変だろうな、とつい考えた。圧倒的なまでに「幕末＋近代初期」の「歴史」一色なのである。

さて時代は下るが、今日の郷土研究関係の中心学会は村田熙、村野守治、宮武省三、内藤喬、築地健吉らによって1951年（1950年とも）に設立された「鹿児島県民俗学会」である。村田（鶴丸高校教諭）が代表で、のちに東京教育大で和歌森太郎教授のもとで民俗学を修めた犀川碇吉、北見俊夫らも参加し、活動が活発化したという。機関誌『鹿児島県民俗』は1954年に発刊された。

ところで、今回はその前身となる「鹿児島県民俗研究会」について考えてみたい。この会は1936

（昭和11）年に設立されている。これには1920-21（大正9-10）年の所謂南北の旅で、沖縄に向かう直前に鹿児島を訪問した柳田國男の影響を見逃せない。向山によれば「本県における民俗研究が真に定着するのはこの柳田氏の旅行が契機になっている」という。柳田の訪問時にどの人物が参集したかは明らかではないが、その後昭和初期には、茂野幽考、昇曙夢、岩倉市郎、永井亀彦らによる「南西諸島」に関する研究が『民族』、『民俗学』、『旅と伝説』等に発表されていく。奄美関係者が多い。

柳田は1936年に鹿児島を再訪しているが、奇しくもこれを受けて研究会は発足したのである。設立にかかわった人物は以下の通りである。檜木範行、永井竜一、野間吉雄、宮武省三、児玉幸多、内藤喬。宮武と内藤の名は戦前の「研究会」結成時のメンバーでもある。いったん1938年檜木の急逝により解散するも、1942年に復活する。結局機

関誌を発行することなく、敗戦を迎えた（以上、向山勝貞「鹿児島県における民俗学研究の動向」鹿大史学no, 18, 1970より）。

ちなみに『柳田國男伝』の年譜によれば、柳田は九州に5回旅をしている。旧いものから並べると次のようになる。1）1908年5月24日-8月22日：九州講演旅行：熊本-八代神社-五木-鹿児島-宮古城（都城？）-加世田-枕崎-穎娃-指宿-椎葉村-大分-広島-四国：『後狩詞記』の旅。2）1909年3月-1910年11月：捕獲審査所助手として出張：長崎-佐世保。3）1910年12月13日-1911年3月1日：九州・沖縄旅行：大阪-神戸-臼杵-延岡-宮崎-飢肥-志布志-鹿児島-佐多岬-指宿-鹿児島-名瀬-那覇-宮古島-石垣島-那覇-名瀬-西仲間-加計呂麻-西古見-阿室-鹿児島-長崎-佐賀：『海南小記』の旅。4）1919年5月1日-12日：講演旅行：呼子-平戸島-長崎-大分。5）1936年4月11日-5月6日：九州講演旅行：神戸-宮島-山口県大島-小倉-福岡-佐賀-長崎-熊本-鹿児島-指宿-枕崎-坊津-泊-久志-津貫-鹿児島-霧島村-村田温泉-大分-神戸-大阪：『木思石語』の旅（？）。

こうしてみると、鹿児島に1908年、1910年、跳んで1936年と3回訪問していることがわかるが、向山は『後狩詞記』の旅であった最初の1908年には言及していない。まだ官僚であった時代であったためであろうか。ちなみに貴族院書記官長を辞任するのは旅から半年経った12月23日である。このあたりもう少し突っ込んでみたいと考える。

（この稿つづく）

「地域文化」研究会ニュースレター 第1号

発行日：2011年3月29日

編集・発行：大城研究室

657-8501

神戸市灘区六甲台町1-1

神戸大学大学院人文学研究科

TEL&FAX: 078-843-8803